

阿波生活

◆主办：德島县国际交流协会

◆二〇〇九年四月

◆第一五四期

中日文化

中日茶道比较

关于中国和日本的茶道，很多人并不真正了解，笔者也是其一。最近真正接触并体验了一次日本茶道，对日本茶道有了一个更明确的认识和理解。这也让我对中日两国茶道的异同点产生了兴趣，通过一系列的查找和阅读资料，终于有所发现，在此愿与读者分享。

中国では、「茶道」と言えば、殆ど日本の茶道のことを指している。しかし、多くの中国人は飲茶は元々中国に源を發しているのに、なぜ日本にしか茶道がないのかと思っている。それと反対に、日本人は却って、中国にも茶道があるか、とよく聞く。実は、いわゆる中国の茶道は、正しい言い方が「茶芸」か「茶文化」である。文字通りに、大きな違いが見られる。中国のは「芸術、文化」で、日本のは「道」である。

中国の茶道

歴史：

茶芸であれ、茶文化であれ、また茶道であれ、疑うまでもなく、それは中国に起源があるのである。中国のお茶の文化は既に五千年の歴史がある。商の末周の始めごろ（紀元前1000年余り）、四川の人たちが既にお茶を飲み始めていたという。前漢の時代（紀元前207年－25年）に、中国の四川の周辺でお茶を飲み、お茶を植えることが極普通なことで、官吏や豊かな家庭では、お茶を日常の飲料としていた。「神農の本草経」（後漢の時代、25年－220年）にも“神農嘗百草，日遇七十二毒，得茶而解之”（「神農が百種の草を嘗めて、ある日七十二種類の毒があつて、お茶で解毒した」筆者注）があつた。ここの「茶」はいわば「茶」のことである。これがお茶関係の一番古い伝説である。三国、晋の時代、南北朝の時代が、茶文化の啓蒙と萌芽の段階だと言える。

唐の時代になると、中国の茶文化が形成されてきた。唐代は茶文化の発展が画期的な意義のある時代となった。唐の末期に、飲茶が盛んになった。唐の「封にこのような記載がある「茶道大行，王公朝士无不飲者。」（「茶道が流行っていて、王侯官吏全員飲む」筆者注）これが現存の文献で「茶道」についての最初の記載である。当時の

在中国，一提起“茶道”这个词，很多时候就是指日本茶道，而很多中国人认为饮茶本来发源于中国，为何只有日本有茶道呢？相反，很多日本人反而会问，中国也有茶道吗？其实，所谓中国的茶道，正确的说法是“茶艺”或“茶文化”。从表述上，我们就可以看出重大的差别。中国的是“艺术、文化”，日本的是“道”。



中国的茶道

历史：

无论是茶艺、茶文化还是茶道，毋庸置疑，最早是起源于中国的。中国的茶文化已有五千年的历史。早在商末周初（公元前1000多年），巴蜀人就已开始饮茶，西汉时期（公元前207年－公元25年），四川一带普遍种茶、饮茶，在官吏富有之家，茶成为日常饮品。《神农本草》（约东汉时期，公元25～220年）中有“神农尝百草，日遇七十二毒，得茶而解之”。这里的“茶”即是茶的意思。这是有关茶的最早的传说。三国、晋代、南北朝时期，应属于茶文化的启蒙和萌芽阶段。

到了唐代，中国的茶文化基本形成。唐朝成为茶文化发展具有划时代意义的时期。晚唐时期，饮茶蔚然成风。唐朝《封氏见闻记》中有这样的记载：“茶道大行，王公朝士无不饮者。”这是现存文献中对“茶道”的最早记载。当时社会上茶宴已经很流行，宾主通过以茶代酒、文明高雅的

社会では、茶会が流行っていて、お茶がお酒の代わりになり、上品な社交活動を通して、お茶を賞味し、風景を鑑賞し、心を述べた。

唐と宋の時代に、飲茶の決まりや儀式が重んじられるようになり、飲茶が修身修養という側面でも知られるようになった。中国人も世界ではじめて茶を修身修養のための方法にしたのである。この時期に、世界で最も偉大なお茶の専門書——陸羽の「茶経」が現れた。

要するに、飲茶は唐から盛んになり、宋、明に盛り上がり、清に衰えたのである。現在、茶は世界各地にあまねく伝わっていて、世界を風靡する三大ソフトドリンクの一つになった。

表現形式：

中国の茶芸は以下のような表現形式がある：煎茶、闘茶、工夫茶。

煎茶とは、茶の粉を急須に入れて、水と一緒に煮て飲むのである。唐の煎茶はお茶の最初の芸術的な賞味形式である。

闘茶とは、茗戦ともいい、文人雅士がお茶とお湯を持っていて、茶の汁を試食し、比べることによって、お茶の優劣を定める芸術である。闘茶は古代でお茶を定める芸術の最高の表現形式であった。

工夫茶は賞味の腕前を重んじている。自分で煎じて自分で賞味するものとお客さんをもてなすものがある。広東省の潮汕で特に流行っている。お客さんをもてなすものを特に重んずる。最初の湯を沸かし、杯を煮、茶葉を急須に注ぎこみ、そして、お茶を見て、嗅いで、賞味するまで、茶事の全体の過程に主客共鳴し、心で感じ、すべての細かいところを享受する。それによって、修身修養し、情操を薫育する。

実用的な価値：

中国の茶芸はお茶で修身修養するだけで満足してではなく、飲茶が人類の健康への真理を探究した。お茶が健康中の作用を発見し、発展させた。たとえば、解熱解毒、明目、利尿、消化を助ける、油を減らす、酔いを目覚ます、長生きなどがある。中国人がまた創造的にお茶と漢方薬を有機的に結合し、その健康作用を十分に発揮させる。これは中国のお茶の最も実用的な価値のあるところで、千年来人々に重視され、好まれている魅力があるところでもある。

茶文化の精神：

茶文化の精神といえば、中国では古くから茶芸があるが、宗教の色が濃くなく、儒道仏三家の思想を融合したもので

社交活動、品茗賞景、各抒胸襟。

唐宋时期，人们开始讲究饮茶的规矩和仪式，并且对茶饮在修身养性方面的作用也开始



有了认识，中国人是世界上首先将茶饮作为一种修身养性之道的。这一时期出现了世界上最伟大的茶专著——陆羽的《茶经》。

总体说来：饮茶之风，盛于唐，兴于宋、明代，衰于清代。今天，茶传遍世界各地，成为风靡世界的三大无酒精饮料之一。

表现形式：

中国的茶艺有以下几种表现形式：煎茶、斗茶、工夫茶。

煎茶，是把茶末投入壶中，和水一块煮，唐代的煎茶，是茶的最早的艺术品尝形式。

斗茶，又称为茗战，文人雅士各携带茶与水，通过比茶面汤花，和品尝鉴赏茶汤，以评定优劣的品茶艺术。斗茶是古代品茶艺术的最高表现形式。

工夫茶，讲究品饮工夫，有自煎自品和待客两种，在广东潮汕一带尤其流行。其中待客更为讲究，从开始的烧水、煮杯，然后将茶叶注入茶壶，观茶、闻茶、赏茶，品茗茶事的整个过程中，主客互动、用心体会、感受，充分享受每一细节，从而修身养性、陶冶情操。

实用价值：

中国的茶艺并未仅仅满足于以茶修身养性，而是大胆地探索茶饮对人类健康的真谛，发现并发展了茶在保健中的作用，如清热解毒、明目、利尿、消食去油腻、醒酒、延年益寿等。中国人还创造性地将茶与中药等有机地结合起来，使其充分发挥保健作用。这是中国茶最具实际价值的方面，也是千百年来始终深受人们重视和喜爱的魅力所在。

茶文化精神：

讲到茶文化的精神，中国虽然自古就有茶艺，但中国的茶艺宗教色彩不浓，它是将儒、道、佛三家的思想融合在一起的，给人们留下了发

ある。發揮と選択の余地を残してくれた。各階級の人々が好みによって、違う側面から、異なる形式や思想内容を選ぶことができる。それで、中国の茶芸あるいは茶文化は厳密な組織形式や杓子定規なきまりが無いのである。

ここ数年来、中国の茶文化の精神をまとめる必要があると主張する学者がいる。大体、清、静、和、美を中国の茶文化の精神あるいは茶芸の特徴とまとめることができる。これが日本や韓国の茶道精神とも通じている。それと同時に、中国の茶文化の精神が「和」だと主張する学者もいる。『和』とは天和、地和、人和を意味している。その内包されているものは非常に豊富なもので、すべての敬、清、寂、廉、儉、美、楽、静という意味を含んでいる。すべての漢字の中で、『和』より中国の茶道の内包と中国の茶文化の精神を表せる言葉が見つからない。」(陳香白:「中国茶文化」43 ページ、山西人民出版社)



日本の茶道

歴史:

最初は平安時代の初期(794年—1195年)、日本からの遣唐使、高僧最澄和尚が中国の茶の木を日本へ持って帰って、そして近畿の坂本あたりで栽培を始めた。これが日本で一番早い茶の木の栽培である。

鎌倉時代(1191年)、日本の僧侶栄西が中国から茶の種を日本へ持ってきて、日本ではお茶を広く植えるようになった。栄西が1211年に日本で最初の飲茶の専門書「喫茶養生記」を書いた。

鎌倉時代後期、中国の南宋末期(1259年)、日本の南浦の昭明禅師が中国浙江省の余杭県の経山寺に来て学問を勉強し、経験を積んで、当寺院の茶会の儀式を学んで、初めて中国の茶道を日本に導入し、日本で最初の茶道を伝える伝播者となった。

室町時代(1333—1568年)になると、畿内の茶農家が茶葉の階級を定めるために、茶質の定め会を行い、だんだん娯楽活動になって、最初の茶道の儀式として発展した。

豊臣秀吉の時代(1536—1592年)になると、中国の明の時代の中後期、村田珠光(1423—1502年)が初めてお茶と禅を結びつけ、礼儀を作り、日本の茶道を創立した。後世の人に茶道の「開山始祖」と呼ばれている。それから、千利休(1522—1592年)がさらに茶道を完成させ、抹茶道を創立した。

日本の茶道の発展は数多くの流派の発展と伴って、今で

揮和选择的空间。使得各个阶层的人们皆可根据喜好,从不同的侧面,选择不同的形式和思想内容。因此,中国的茶艺或茶文化没有严格的组织形式和清规戒律。

近年来,有学者主张对中国茶文化的精神作以总结。大体上,清、静、和、美可以总结为中国茶文化的精神和茶艺的特点。这与日本、韩国的茶道精神也是相通的。不过也有专家认为中国茶文化精神的核心就是“和”。“和”即意味着天和、地和、人和,它的内涵非常丰富,一个“和”字几乎囊括了所有敬、清、寂、廉、俭、美、乐、静等意义,可以说,在所有汉字中,再也找不到一个比“和”更能突出中国茶道内核、涵盖中国茶文化精神的字眼了。”(陈香白:《中国茶文化》43页,山西人民出版社)

日本の茶道

歴史:

最早在平安时代初期(公元794年—1195年),来自日本的遣唐使,高僧最澄和尚,将中国的茶树带回了日本,并在近畿的坂本一带开始种植,这是日本最早栽种茶树。

鎌倉時代(公元1191年),日本僧人荣西,首次将茶种从中国带到了日本,从此日本开始遍种茶叶。荣西于公元1211年写成了日本第一部饮茶专著《喫茶養生記》。

鎌倉時代后期,中国的南宋末期(1259年),日本的南浦昭明禅师,来到中国浙江省余杭县的经山寺求学取经,学习了该寺院茶宴的仪式,首次将中国的茶道引进了日本,也成为茶道在日本的最早传播者。

到了室町时代(1333—1568年),畿内的茶农为了对茶叶评级,而举行品茶会,逐渐成为了一种娱乐活动,并发展成了最初的茶道仪式。

直到丰臣秀吉时代(1536—1592年),中国明朝中后期,村田珠光(1423—1502年)首次真正将品茶与禅联系起来,并制定一系列的礼节,创立了日本的茶道,他被后世称为茶道的“开山鼻祖”。而千利休(1522—1592年)进一步完善了茶道,形成抹茶道。

日本茶道的发展伴随着众多流派的发展,

も伝えられてきた。現在、日本各地にも茶道教室があり、暇の時間を利用して、伝統文化を勉強し、一瞬の休憩享受を楽しむのである。

茶の形式：

日本の茶道は主に抹茶道と煎茶道がある。

抹茶道は、中国の隋の時代に発生し、唐に盛んになり、宋に盛りあがり、今まで千年以上の歴史を持っている。しかし、明に入ってから、中国では、お茶を浸して飲むのが流行っていて、抹茶はすぐに消えてしまった。九世紀末に抹茶が遣唐使に付いて日本に入ってきて、大いに発揚された。抹茶は発酵茶ではなく、蒸された茶葉を自然に乾燥させ、そして粉に研いで、それで抹茶と称する。

煎茶道は明朝の末、明の高僧隱元隆琦が明の煎茶道を日本に持ってきた。それから、日本には抹茶道のほかに、煎茶道という分類も現れた。抹茶道が武士階級に進められるのと違い、煎茶道は特に日本の文人墨客階級に好まれている。しかし、残念なことに、明の煎茶のほんの一部だけ保存されていた。それは主に茶礼である。茶詩や茶画など、明のように発展していない。

茶道の精神：

日本の茶道の精神といえば、千利休をあげなければならない。千利休が日本茶道の集大成者で、明確に茶道の「和、敬、清、寂」の基本の精神を提出した。それが「茶道四規」ともいう。茶室での飲茶によって、自己思想を反省し、静寂の中で、内心の埃やお互いのわだかまりを取り除き、和と敬の目的に達することを要求する。

この理論は明らかに中国の茶道の影響で形成したのである。和と敬が人間関係を処理する規則で、飲茶を通して、うちとけて付き合いをする。それで人間関係を調整するのである。清と寂とは環境の雰囲気と言う。優雅で静かな環境と素朴な施設により、静寂な雰囲気を作り、薫陶してもらう。

日本の茶道は宗教（特に禅宗）の色彩が濃く、厳密な組織形式を形成している。厳しくて複雑で、甚だしきに至っては煩わしいほどの出演形式により、「茶道四規」を実現するのである。これがゆったりとして自由な雰囲気欠缺すると主張する人もいる。

結論

以上をまとめてみれば、簡単な対比ができる。

至今得到传承。今天在日本各地都有茶道教室，人们闲暇时间学习传统文化，享受静心休息的片刻。

茶的形式：

日本茶道主要有抹茶道和煎茶道。

抹茶道“抹茶”起源于中国隋朝，兴于唐朝，鼎盛于宋朝，至今已有一千多年的历史。但是，明代以后，中国开始流行冲泡饮茶，“抹茶”即在中国消失。九世纪末，“抹茶”随遣唐使进入了日本，随即得以发扬光大。抹茶并不是发酵茶，它是将蒸过的茶叶自然干燥，再研成粉末，这样就称为“抹茶”。



煎茶道：明朝末年，明代高僧隱元隆琦，将明代的煎茶道传入日本，自此，除了抹茶道外，日本出现了另一个茶道类别，煎茶道。与抹茶道多为武士阶层所推崇不同，煎茶道尤为被日本文人墨客阶层所喜爱。只可惜煎茶道在日本只保留了明代煎茶文化很小的一部分，基本是茶礼。而茶诗、茶画等，则没有得到明朝那样的发展。

茶道精神：

说到日本茶道的精神，就必然要提到千利休，他是日本茶道的集大成者，是他明确提出了茶道“和、敬、清、寂”的基本精神，也被称为日本“茶道四规”，它要求人们通过茶室中的饮茶，进行自我思想的反省，于清寂之中，去掉自己内心的尘垢和彼此的芥蒂，以达到和敬的目的。

显然这一理论思想，是受到了中国茶道精髓的影响而形成的。和、敬是处理人际关系的准则，通过饮茶做到和睦相处，以调节人际关系。清、寂是指环境气氛，要以幽雅清静的环境和古朴的陈设，造成一种空灵静寂的意境，给人以熏陶。

日本茶道的宗教（特别是禅宗）色彩很浓，并形成严密的组织形式。它是通过非常严格、复杂，甚至到了繁琐程度的表演程式来实现“茶道四规”的，有人认为这样较为缺乏一个宽松、自由的氛围。

结论

综上，可以做出一个简要的对比。

第一に、中国の茶文化は主体が人間である。お茶が人間の客体として、人間のために存在しているのである。天人合一を強調し、小さい急須から大きい宇宙の玄妙な道理を探求し、淡々とする茶の湯から人生の百味を味わうのである。

中国の茶文化が美の哲学と称され、中国古典哲学の美学理念に大きく影響されている。哲学の高度から広くて深く茶人に影響している。中国の茶文化で、仏教の変化に富んでとらえがたい美と道教の闊達な美、および儒家の上品で含蓄の美を含んでいる。

これに対して、日本の茶道は主体の「無」を主張する。主体を薄め、さらに主体の絶対否定を主張している。「無」の化身として出現したのは有形の理念「和、敬、清、寂」である。

日本の茶道は、茶会を行うときに、「一期一会」の態度をを求める。いわば一生に一回しか会えない。この観点は仏教の無常観から来たのである。仏教の無常観は一分一秒を尊重し、一時の事々を大切にすることを要求している。

独坐という理念は、お客さんが帰った後、独りで茶室で「静思」をする。お茶の釜ひとつに向って、独りで座っている。終わったばかりの茶会を振り返って、茶人の心に茫然の気持ちが浮かび漂い、同時に充実感もわき始める。茶人のこの時の気持ちが「主体の無」と言える。

第二に、中国の茶文化の発展は下から上まで行ったので、庶民の日常の慣わしで、そのため幅の広さに特徴があり、博大を求め、形式にこだわらない。それによってこそ、中国の茶文化が中国の文人たちの洒脱で、百花開放、百家争鳴の状態を現している。

しかし、日本は全く反対で、上から下へ発展したのである。お茶が最初日本に伝わったとき、完全な贅沢品であった。皇族や貴族、少数の高級僧侶しか飲めなかった。茶道は高級な先進文化として皇室のまわりに限られていて、神聖な光輪が覆われていた。

要するに、中国の文化では、「道」は非常に神聖で厳かなことである。そのため、中国では、お茶に対して、ぼんやりと「茶文化」か「茶芸」をいい、あえて「茶道」とは言えないのである。日本の茶道はお茶を宗教の哲学や社会の道徳、および品行修養を一体と融合し、お茶を「道」とい

第一、中国的茶文化主体是人，茶是作为人的客体而存在的，是为人而存在的，强调天人合一，从小茶壶中探求宇宙玄机，从淡淡茶汤中品悟人生百味。

中国的茶文化被称为美的哲学，它深受中国古典哲学中美学理念的影响，从哲学的高度，广泛而深刻地影响着茶人。在中国茶文化中，既有佛教的空灵之美，又有道教旷达之美，及儒家文雅含蓄之美。

而日本茶道则强调主体的“无”，淡化主体，甚至主体的绝对否定。作为“无”的化身出现的是有形的理念“和敬清寂”。



日本の茶道，在举行茶事时，要求抱有“一期一会”的心态，即一生只见一次。这种观点即来自佛教的无常观。佛教的无常观督促人们尊重一分一秒，认真对待一时一事。

独坐的理念，即客人走后，独自坐在茶室“静思”。面对茶釜一只，独坐茶室，回味此日茶事，茶人的心里泛起一阵茫然之情，又涌起一股充实感。茶人此时的心境就可称作“主体的无”。



第二，中国的茶文化发展是自下而上的，是来自平民大众的日常习俗，因此其发展的特点在于广度上，以求博大，形式不拘。也正是因为这一点，中国的茶文化，由于中国文人的洒脱不羁，呈现出百花齐放、百家争鸣的状态。而日本则恰恰相反，是自上而下发展的。茶最初传到日本时，完全属于奢侈品。只有皇族、贵族和少数高级僧侣才可享受。茶道被当做一种高雅的先进文化而局限在皇室周围，被罩上了一层神圣的光环。

总之，在中国文化中，“道”是一种非常神圣、非常严肃的事。所以中国对于茶，只是笼统的称之为“茶文化”或“茶艺”，而不敢奢谈“茶道”。日本茶道将品茶与宗教哲学、社会道德、品行修养融为一体，将饮茶上升到了“道”的

う高度まで上げた。これが両国茶文化での最大の違いである。一つの側面から両国文化、価値観の違いを表した。よって、外見から見ると、近代から、中国の茶文化が衰えつつあり、日本には及んでいないように見えるが、深い内層から見たところ、両国



高度。这就是两国茶文化上最大的差异，也从一个侧面反映了两国文化、价值取向上的差别。所以，从表象上看，自近代以来，中国的茶文化趋向于没落，反而不及日本这位后来者了；但从深层次上看来，这是由两国的民

族の心理状態や文化の蘊蓄で決められたのである。中国では、お茶はただ一種の芸術で、人間に付属している文化現象であるが、日本では、神聖で厳かな大きい「道」なのである。

族心态和文化底蕴所决定的：在中国，茶只是一门艺术，是从属于人的一种文化现象；而日本，则是神圣、严肃的大“道”。

(文、翻译：时晓阳)

(资料参考：百度百科 图片来源：http://blog1.poco.cn/items/item_details.htm?item_id=17687592)

德岛见闻

说告别，道再见

浏览了一下近两年的《阿波生活》4月号，几乎每任编辑都在这一期做了一个总结，以示告别。今年也照例吗？先问了问自己。每个总结，内容其实大同小异，因为大家几乎都是在这生活一年，大多也都是初次的日本生活，因此，所感所悟，差别不大。但是，似乎已是惯例，就不打破了吧，姑且做个总结，作为留念。

这次来德岛做国际交流员，是初次的海外工作和生活。德岛生活一年，从最初的漫长，到最后的匆匆，期间经历了太多的惊喜和悲伤，为这第一次的海外生活画上了还算圆的句号。

小城德岛，只能用“小城”来形容它了，比起中国的城市，它实在不算大，给人第一印象是干净与安静。来时近4月中旬，正值春暖花开季节，街两旁是3,5层或5,6层的楼房，并不显得压抑，市内有河流直接穿过，清清碧水，沁人心脾。跳着阿波舞的偶人雕像，微笑着迎送着过往的人们。看着周围慢慢行走着的人们，或老年人互相搀扶着，或小朋友嬉戏着，身上是温暖的阳光轻抚着，感觉是无比地惬意。

然而，美丽的环境还是抚慰不了寂寞的心情。初来海外，虽然语言学习已经多年，真正来到这个环境中，还是很难马上适应。看到商场、超市、水果店的商品，琳琅满目，可是那些汉字夹杂着片假名的商品名称和价钱，此时只能让我烦躁不安，甚至无助。

除了语言，文化冲突显得尤为突出。街边瞥见的“花圈”让人大跌眼镜。商场、超市里，不小心碰到了人家，反而马上会听到对方的“すみません”，这“すみません”俨然是口头禅。工作单位的走廊里，虽是陌生的脸孔，也会微笑着向你道“お疲れ様です”……最初感到十分地惊奇，然后慢慢地适应了，最后会学着人家讲这些礼貌语，做礼貌的动作了。这就是入乡随俗，文化上的熏陶和学习吧。

工作方面，包括学校访问，汉语讲座等，这些活动也成了文化交流的一部分，向日本人介绍中国概况和文化，也将自己在日的所见所感传达给他们，同时，他们也会畅谈自己对中国的感受和认识。同这些日本朋友一起感受这两个近邻在文化上的相通与不同，是件很有趣、很有收获的事。

这一年的工作和生活，让我充分感受到国际交流工作的重要性，体验到客观地认识和理解一个国家、一个民族是多么重要，两个即使再近的邻国，在文化方面差别也会如此之大，如果对此不了解，也不主动去了解，那么就会造成更深的误解，受到损害的只能是两个国家的人们。也许常年居住在海外的朋友，会有不同的感受，那大概是更深刻，或是十分透彻的理解吧。总之，只有相互理解才能消除隔阂，进而促进交流和发展。也就是说“和而不同，求同存异”！

一年的时间，对于适应新的环境不多不少。只可惜现在要离开了，要告别这个温馨的小城，回到那个喧嚣的大都市了。我会带着这里的一切回忆，走进下一阶段的人生！祝福生活在这里的同胞们，无论何时，你们都是中华民族的一员，无论生活在哪里，都有祖国的人们惦记着你们，我也是那其中一员！祝大家生活幸福！

(时晓阳)

日语课堂

有趣的中日同形异义汉字

日语中的汉字基本上都来源于汉语，只有少部分自创汉字。这些来源于汉语的词汇，有些保留了汉语的意思，也就是将汉语中的相应含义的词汇对应其日语，也有一些借了音，而意思却完全改变了，这一类词对于初学者来说，无论是学汉语的日本人，还是学日语的中国人，都是个小小的“麻烦”，因为很容易造成误解。不过，对于教师来说，这些词多数时候都是很好的教学素材，可以调节教学节奏和教学效果。笔者在教学过程中，也发现和总结了一些中日同形异义的词汇，在此同各位读者分享。

- 手紙（てがみ）信
- 汽車（きしゃ）火车，列车
- 愛人（あいじん）情人，相好
- 老婆（ろうば）老太婆
- 娘（むすめ）女儿
- 先生（せんせい）对老师、医生等的称呼
- 新聞（しんぶん）报纸
- 床（ゆか）地板
- 丈夫（じょうぶ）坚固
- 大丈夫（だいじょうぶ）没关系
- 家内（かない）妻子，内人
- 前年（ぜんねん）前一年，头年
- 文句（もんく）言语，话
- 是非（ぜひ）务必
- 勉強（べんきょう）学习
- 大家（おおや）房东
- 野菜（やさい）蔬菜
- 人参（にんじん）胡萝卜
- 電車（でんしゃ）轨道交通
- 伝言（でんごん）传话，口信，带口信
- 火の車（ひのくるま）经济状况不好
- 天井（てんじょう）天花板
- 出世（しゅっせ）成功，成名
- 酸素（さんそ）氧气
- 合同（ごうどう）合并
- 交番（こうばん）派出所
- 怪我（けが）创伤，疮痍，受伤
- 迷惑（めいわく）麻烦、烦扰

- 邪魔（じゃま）打扰
- お邪魔しました 打扰了
- 処分（しょぶん）处分，惩处
- 用意（ようい）准备，预备
- 留守（るす）缺席，不在场
- 演出（えんしゅつ）演出，导演，组织安排
- 暗算（あんざん）心算
- 一味（いちみ）一伙，同伙，同类

日语中还有很多类似的跟汉语同形异义的词，以上主要是些名词，有些很是让人忍俊不禁，比如“手紙”和“娘”这两个词，是初级日语（汉语）课最常用的例子，因为他们的意思简直相差十万八千里。还有一个词，中国人来到日本后，都会感到不可思议的，就是“錢湯”这个词，通常出现在街头一些店的招牌上，乍一看“钱”和“汤”怎么会放在一起呢，到底是做什么的呢？当然，学过日语的就会明白，这是“澡堂”。

最令人捧腹的要数下边这句话“油断一秒、怪我一生”，这句话通常会出现在高速公路这样的地方。不懂日语的人看了通常会吓一跳，为什么油断一秒都要怪我一生呢，跟我有何关系呢？其实，“油断（ゆだん）”在日语中是马虎，不小心的意思，而“怪我（けが）”则是受伤的意思，在高速公路上，当然安全驾驶为头等重要，一秒钟不小心，就有可能造成一生的伤残，当然不可马虎大意！

日语中其实还有很多动词也跟汉语意义不同，在此就不一一列举了。在您学习日语这门看似同我们的母语最接近的语言的时候，遇到这些似熟悉又不懂的字词，一定要认真对待了，可千万不能马虎过关，导致误读错解了。（文：时晓阳）

来自“助任保育园”的消息

- 请带着你的宝宝一起过来吧！
- 这里的老师，会照顾好你的宝宝。
- 时间：每周四 11:00 ~ 12:00
- 内容：“助任保育园”开办日语教室
- 费用：免费
- 地址：德岛县德岛市中吉野町 1 丁目 65-1

本月活动

◆北岛郁金香展览会（北岛町）

时间：2009/4/ 上旬～下旬 ※花期结束为止

9:00～17:00

地点：板野郡北岛町中村字日開野（北岛中央公园正南面）北岛チューリップ公園

内容：此处种植了许多北岛的特产郁金香，开花时作为公园对外开放。期间逢周日将举行小型活动。公园内二千平米的苗场内，有50种约4万3千株郁金香竞相开放。

垂询：北岛町生活产业科 TEL 088-698-9806

交通：・JR 高德線「勝瑞駅」下车→乘出租车约8分钟
・JR 德岛駅→德岛バス鳴門行き「老門」下车→徒歩10分钟

◆弁天山樱花节 赏灯会（方上町）

时间：2009/4/1（三）～10（五）18:30～21:30

地点：德岛市方上町弁财天8番地1
弁天山周边地区

内容：活动期间，弁天山周边及山顶，将设置500w的照明灯16个，在登山口处设置1kw的水银灯一个。欢迎您前来打开游山箱（先到的200位将赠送寒天）另外，4/5（日）的8:00～15:00有当地农产品的展卖活动，10:00～15:00有木偶浄琉璃演出。

费用：入场费・参加费 免费

垂询：NPO法人弁天山保存会 理事长 井上武

TEL 088-669-1163 090-5149-6277

交通：JR 牟岐線「地藏橋駅」下车→徒歩10分钟

・德岛市营バス渋野行き「方の上小学校前」
下车→徒歩4分钟

◆神山・岳人石楠花节（神山町）

时间：2009/4/29（二）～5月下旬9:00～17:00

地点：名西郡神山町上分 石楠花之乡
岳人之森宿营地

内容：四国地区石楠花第一名所，剑山林荫大道的主要宿营地。场地内生长着多种受到保护的野生草木。从山上的小屋，可欣赏到朝向砥石权现（海拔1375米）的砥石权现登山路的优美景色。

费用：大人400日元 儿童300日元

垂询：石楠花之乡 岳人之森宿营地

TEL 088-677-1147

交通：JR 德岛駅→开车约80分钟

◆紫藤节（石井町）

时间：2009/4/18（日）～5/3（日）

地点：名西郡石井町 地福寺及周边地区

内容：宽政年间地福寺住持隆淳上人在庭院里种植紫藤以来，200多年后，现在已满树泛着紫藤波浪，高达38米的满开的紫藤树十分赏心悦目。届时还将举行紫藤盆栽的品评会，名树竞赛。此外，还有元祖祭、摄影会、当地物产展卖、跳蚤市场等。

垂询：石井町商工会 TEL 088-674-1292

交通：JR 德岛線「石井駅」下车→徒歩1分钟

■ 发 行 ■

地址：〒770-0831

德島市寺島本町西1-61

クレメントプラザ6F

TEL 088-656-3303

FAX 088-652-0616

http://www.topia.ne.jp

E-mail: topia@topia.ne.jp



■ 发 行 ■

地址：〒770-8570

徳島県民環境部文化国際課

徳島市万代町1-1

TEL 088-621-2028

FAX 088-621-2850

http://www.pref.tokushima.jp

主編：时晓阳

正しい知識で、差別解消